使命論の試み－全体に生きる個の一形式－

近藤良樹

１．使命の再認識

現代社会は、ひとをつつみこむさまざまな社会的組織をもち、多彩な生産・創造の活動にみちあふれている。だが、この豊かな創造性と社会性のなかにいながら、むしろ個人は、それらのことから疎外されていく傾向にある。近年わが国でも盛んになっているボランティアは、この社会性を求め、働くことの喜びをもとめた個人の自発的な活動になるが、創造性や社会性をしっかりともったわれわれの活動ということでは、その自覚の一形態として、「使命」というものがある。

ボランティアは、つい最近のことばになるが、「使命」は、それに比べるとそうとうの歴史がある。昨今、「使命に生きる」といったことばを耳にすることは少なくなったが、それでも、個人の社会的な活動への自覚のことばとして、「困難だが、これは、自分に与えられた使命なのだから」と、ファイトを燃やすひとを見ることができる。本来、ひとは、自分の属する社会に根づいた生き方をし、創造的な活動に生きたいという願いをもっている。現代社会は、個人の創造性や社会性を端的に満たす「使命」のようなものをもう少し意識し、大切にしていく必要があるではないかと思う。

最近のわが国の若者は、労働意欲が低くなり、フリーターをしながら、気ままにいきていくものがふえている。しかし、はたして、かれらは、本当にそれでよいと思っているのであろうか。自分の存在・いのちをかけるようなものが見出せないから、そうしているにすぎないのではないか。現在進行中の情報革命は、これまでのような古典的な労働・仕事というものを不要にしつつあり、さしあたり、このままの体制では、フリーターぐらいしかないという大失業時代になりかねない勢いだが、長い目で見れば、難行苦行の労働からまもなく解放されようとしているということであろう。それは、人類のもっている多彩な能力の開放となり、創造性に富んださまざまの活動の展開が可能になることである。単に労働から解放されたというのみでは、消極的には、趣味に、遊びに生きるホモ・ルーデンスになるだけであろうが、ひとの生きがいは、もっと創造的で社会的な意義の見出されるようなものでないと、十分にはみたされないのではないか。古典的な労働をふくみつつ、それらより広範な活動についていわれる「使命」は、この社会の今後を考えていくためにも、再認識されておく必要があろう。以下に、すこしこの「使命」を分析してみたいと思う。

さて、「使命」とは、なにになるのか、簡単に定義することからはじめよう。「教師の使命」とか「消防団の使命」というが、それらは、かれらの所属する社会から与えられ求められている「教育」や「防災」の任であり、そのことばからは、身のひきしまるような尊い務め、責務というようなものが感じられることであろう。あるいは、使命といえば、ルターの、世俗の職業を「使命」ととらえたことが想起されるが、この使命は、神がこの世のひとびとに命じ求めている、各人の尊い務めであった。ということであれば、使命は、さしあたり、「帰属する全体やその命令者か

ら求められている尊い務め」ぐらいに定義しておいてよいであろうか。

これは、実在的な社会参加のあり方としてのボランティアや勤労、文化的活動あるいは政治・宗教の活動等までの広範な活動について、それを、崇高な務めというような形で、社会的個人的に評価したものである。いわば、実在的な活動についての、観念的な評価である。ボランティアとは、位相を異にする。実在的な社会的活動形態であるボランティアなどについての、観念的評価であり、当人の自覚のあり方になる。

この使命は、一方では、至高の存在者とか社会全体から、それに帰属している者に命令され与えられるものとして所与的であり、あるいは、命令する者にとっての手段となるものであり、所与・手段等の特徴において捉えられる。われわれの漢字の「使・命」も、使いとして命じられるということで、使命の根本的な所与性・手段性をしめしている。

しかし、他方では、使命は、これを担うもの自身からいうと、生きがいそのものであり、ひとは、この崇高な務めに生きることができれば本望であろう。これには、いのちをかけることもいとわないほどに情熱をかたむけ、能動的自発的となる。プロテスタントが世俗の職業を「使命」ととらえたことの、西洋の資本制にとっての意味を問題にしたウェーバー（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）は、使命を「自己目的 Selbstzweck」と特徴づけているが（註1)、使命は、たんなる手段にとどまるものではなくて、これそのものが生きがいであり、ひとをひきつける目的となるものでもある。

この受動的手段的側面と能動的目的的側面の二面からなる使命について、まずは、その受動面、課題の所与性あたりから、使命の諸様相を見ていくこととしたい。

２．課題の所与性

ところで、Mission（使命）は、「使節」「伝道」という意味でもある。伝道も使節も特定の課題・目的がしっかりと与えられていてはじめて、そういうものになりうる。それは、自分が勝手に作り出すものではなく、自らの属する全体とか組織の命令者から与えられるものであろう。

ルターは、世俗の職業を「使命」ととらえたが、それは、教会の聖職者と同じく、神から与えられた務めということであった。それまでは、神の使い、神からの使命(vocatio=Beruf)は、聖職者を特徴づけるものであったが、ルターは、万人が神のもとでは同じだと捉え、聖職者を特別視することをやめた。そのために、世俗の職業も、神からのものに、神からの「使命 Beruf」と捉え直されることになった。ウェーバーによると、Beruf ということばを世俗の仕事そのものの意味に使ったのは、このルターが最初だという（註 2)。教会の聖職が使命であるのは、神の使いであり、神の思し召しにしたがっての所与の務めであったからだが、使命のこのありかたは、ルターでも同じであって、世俗の職業としての使命においても、それが、神から与えられたものという根本性格をもっていたことはいうまでもない。ルターの職業＝使命はもちろん、一般的にいって、使命は、与えられるもので、使いであり、命じられ求められているのだという所与性・受動性が根本に存在しているといえよう。

では、かりに、はじめから自発的にすべてをとりしきるばあいは、つまり、課題が所与では

なく、自分のたてるもののばあい、それは、使命にはならないのであろうか。好きな仕事、たとえば「花屋」に生きがいを感じ、「これこそ、わが天職・使命だ」と、自分が勝手に使命と思い込むようなことがあろう。自分で課題・務めを見いだし、自分で自分に命令してこれを担わせているのである。それでも、花屋であることが自分に「うってつけの仕事」「適職」だというのみではなく、これを「使命」と感じるには、「これこそ、天の与えたもの」と、神とか花の精の女王あたりからの自分に託された命令・求められた務めととらえるところがなくてはならないのではないか。

日本語の「使・命」には、「使い」「命令」が含まれていて、われわれは、なんらかの形で、使わされ命令されているという被授与というか所与・受動性を、このことばには感じているのではないか。使命の意味を含んでいるドイツ語には、Sendung, Mission, Beruf, Aufgabe,Bestimmung 等があるようだが、Mission はいうまでもなく Sendung も、「派遣」という意味でもあり、使わされ送られるのだとの被授与性・受動性がそのもとにはありそうである。有名なルターの例の Beruf は、いまでは主として「職業」の意味でつかわれるようで、ウェーバーの『Wissenschaft als Beruf（職業としての学問)』にしても『Politik als Beruf（職業としての政治)』にしても、その話の内容から見て、その「Beruf」は、とうてい「使命」ではなく、純然とした「職業」の意味に使われているように思われるが、もともとは、そのことばを見ると、Ruf は「呼び声」「呼び出し」であり、呼びかけられ命じられてというような授与・所与性格をもつ。

そのことは、Bestimmung にしても同じで、Stimme は、「声」で、命令に「合わせる stimmen」というような意味があったのだろう。Aufgabe も、geben(与える)によるものとして授与・所与性をうかがわせる。しかし、フィヒテ(『全知識学の基礎』)は、その自我の哲学を論じる際、Aufgabe をいうが、所与性をしめす外からの触発としての「Anstoss（障碍)」に対置して、自己自身によって定立されるものを「Aufgabe（課題)」と表現している(註 3)。外からの所与の否定として Aufgabe(課題)をとらえているのである。また、ヘーゲル（『大論理学』）は、Bestimmung（規定＝使命）を論じるが、これを、他から規定された受動的否定的な「規定性 Bestimmtheit」に対置して能動的「肯定的」なものとし、さらに、他の影響下にある「向他有」と対立した、自己自身に即しての「即自有」とも規定して（註 4）ものの自立的本性ととらえ、この規定=使命の一層具体化した能動的な範疇として「当為 Sollen」をあげて、むしろ授与・所与性、受動性とは反対の意味をもたせている。さかのぼって、カント（『人間歴史の憶測的起源』『人間学』）は、人間は動物として「神の声 Stimme」「自然の声 Ruf」（註 5）にしたがっての「自然的な使命 Bestimmung」（註 6）に生きていたが、「理性」にめざめるとともに、これからはなれ自立し、「人間の使命 Bestimmung」は、自らの「理性によって使命づけ bestimmen られて」立てられることになった（註 7）という。この人間の理性的使命のもとでは、Bestimmung は、神の声（Stimme）によるのではなく、自己自身が自らの理性の声によって自己立法し自己に命令するものになったのである（初期フィヒテも、同じように、「理性的存在」の「自己との完全な一致」（註Ⅵ 297）を理想とし、それへと努力していくことを人間の使命としている)。カントやヘーゲルにみられ

る Bestimmung(使命)のもとでは、使命は、自己が自己自身に課題を設定し自己に命令する形になり、外から与えられるものとしての所与性をしりぞけるようなものになっているのである。

われわれ日本人は、自立した個として自己立法的であるよりは、周囲に依存し、他から命令されて動くことを好むようなところがある。花屋さんが勝手に自分の「使命」をいうときにも、使命というからには、やはり、なにものかに「そう求められ命令されているのだ」と受けとっているのではないかと（筆者などには）想像されるが、それは、根深いわれわれの依存的心性が、もともとの「使・命」の受動性・授与性を消し去ることを拒んでいるからなのであろうか。その点 Bestimmung として使命をヘーゲルらがいうばあい、始源的には授与・所与だったとしても、現今においては、もともとのところから離れ自立していて、自己の Bestimmung(使命)は、自己の本性(Bestimmung)そのもので、すべて自分で、はじめからとりしきるものになり、自立者の使命は、その課題・命令も外からではなく、自己自身において、自己立法的に立てるものになりうるのだと誇っているように見える。とすれば、使命は、授与性・所与性のない端的な自発性にもとづくばあいも、つまり、さきの花屋さんのように、外からなにものかに命令されているということではなく、自分で勝手にそう思い、もっぱら自分で自分にそう命じているというようなばあいにも、使命として成立しているのだということになろう。しかし、どうも、筆者には、使命の根源には、他から求められ命じられてという（被）授与性がなくてはならないように感じられてならない。

フィヒテは、「使命 Bestimmung」というテーマを追い続けていて、『学者の使命』とか『人間の使命』などの論著をもつが、初期のばあいは、カントと同じく、ひとの理性的な自己立法・自律に使命の中心をおいていた。だが、後には、超越的なものからの使命に重点をおくようになる。理性の自己同一・自由をいいつつも、その背後に無限理性としての超越的な父なる神がいわれることになり、この父に、ひとの崇高な使命は「委託されている anvertraut ist」（註Ⅱ　309）というようになっている。使命には、本来、命じられ委託されてというような契機があるからなのかもしれない。もっとも、フィヒテの場合は、後になるほど宗教的になっていて、これが使命についての理解を変えているのであって、使命そのものが本来そうだからだというのは牽強付会になろうか。

日本語の「使命」とドイツ語の「Bestimmung」には、かなりのちがいがある。われわれの「使命」は、われわれ日本人の生き方の特性が凝縮されているのだし、ヘーゲルらの「Bestimmung」には、かれらの独立心にとんだ生き方がおのずから反映されているのであろう。自然科学の方では、どの国のことばによろうとも、その対象はおおむね同一で議論は容易になりたつ。しかし、人間にかかわるものが対象のばあい、その生き方は多様で各国語各様の切り方で取りあげて言語化されるから、「使命」をそのまま「Bestimmung」として論じると、あやまりになる可能性が大きい。「使命」は「使命」であって、これを「Bestimmung」として論じるのは、日本人の頭髪を問題にしているとき、ドイツ人の口ひげをもって論じるようなもので、注意が必要であろう。Bestimmung に無前提・自立性の特徴があるからといって、われわれの「使命」もそうだと安易にいってはならないのである。なお、ヘーゲルは、Bestimmung ということばをよく使うが、そ

れを「使命」と翻訳して適訳となる個所は、おそらく１パーセントにもみたないのではないかと思う（ほとんどは「規定」という意味での使用になる)。

３．役割の分担とその重み

使命は、一般的には、一人してはじまるものではない。典型的には、全体をつかさどる命令者があって、これが各人の分担を見定め、その分担を適任者に求め命令するところに成立する。使命をになうものは、その与えられた特定の課題を分担し、全体的な営みの中でのひとつの歯車になるのである。使命では、使い手の一部分になり、大目的をもつ全体の単なる手段になりきることが求められている。自身で、勝手に使命を感じるというばあいでも、花屋さんであることに使命を見いだしているものは、当の社会なり天や神から、全体のなかでの有機的な小部分の役割を分担するようにと、その仕事に選ばれて指名されていると、自らにおいて、役割分担の想定をしているのではないか。

しかし、その者の帰属する組織の命令者からの任務分担の命令があったからといって、ただちにそれで使命になるわけではない。見当違いの、納得できない命令は、「使い」「職務」としてこれに従うとしても、それを「使命」と捉えることはできないであろう。使命感をもつものは、これを生きがいとし、尽力するにあたいするものとして主体的にとりくむのであるから、使命では、そうなれるような適切な、誇らしい課題の与えられることが前提になる。その課題・務めは、全体にとって重要で不可欠なものであって、だれかが担う必要があるということとともに、それを担うものが適切に選びだされ、当人がその持ち前の能力を十分に生かしうるようなものになっていなくてはならない。

ところで、「使命」ということばのひびきのうちには、たんなるこどもの使いではない重みがある。厳粛な重みを感じるのは、ひとつには、その分担する部分は、命令者、あるいは全体にとって、重大な務めで、それにことの命運がかかっていたりするからであろう。もうひとつの理由は、しばしば、使命を担うもの自身にとり、全力をつくさなくては達成されないような、高度な課題が与えられることにあろう。Aufgabe(使命)は、「課題」「宿題 」であるが、宿題として与えられるのは、ひとりでできる能力ぎりぎりの高度なものになる。

ヘーゲルは、Bestimmung(規定＝使命)に対応したその外面を「限界 Grenze」としている（註8)。ぎりぎりの背伸びした限界において、そのものの高い固有の本性（規定＝使命）が成立するということである。「地域での大学の使命」は、地域のひとから求められ、期待されているものだが、しかし、その地域の商店などがつよく期待しているであろう「人集め」は、その地域のひとも大学の「効用」とか「効果」等とはいっても、「使命」とはいわない。それは、人集めがたんに本来の仕事・務めでないということによるだけではなく、「使命」は本来的に尊いもの崇高なものとの思いがあるからでもあろう。大学の使命のもとには、それ固有の、他にかえがたい崇高な能力の発揮が、つまりは知的文化的貢献が、そこに期待され求められているということであろう。

４．使命の犠牲的性格

使命には、悲壮な気分のまといつくことがある。神の使命をになう者は、その使いとして身をつつしみ神の道具・奴隷になることを引き受けているのである。あるいは、異国・異教のもとへと伝道の旅に出るものは、神の武器となってよろこんでその犠牲になろうと決意しているのである。使命を担うものは、これを命じるものの忠実な使いであり、その大目的のための一手段になりきるのである。

ウェーバーが使命を「自己目的」と規定するように、使命は、たしかに生きがいであり、それ自体が目的となる面をもつが、本源的には、使いであり、手段であろう。ルターのいう世俗の職業＝使命にしても自己目的ではありえなかった。各人の使命は、あくまでも神の手段にとどまる。神の大目的そのものは、当人たちには、かならずしもさだかではないとしても、その職業は、使命としては、神の全体的な配慮のもとにその神聖な手段になっているのだと自覚されていたことであろう。プロテスタントの敬虔な信者たちは、その世俗の苦しい仕事が、神の栄光をしめす一つのあかしとなり、はかないにしても一本のろうそくとして神の役にたつことに、その犠牲に喜びを見い出していたことであろう。

自分の共同体のために、自分の祖国の防衛のために、英雄たちは使命感に燃えて雄々しくそのいのちをささげていった。だが、そこにある冷厳な事実の一面は、そういう全体のための犠牲・手段として虫けらのように死んでいったということである。使命の犠牲的側面は、ここにきわまる。

使命では、自己犠牲が求められるのだが、それはいやいやながらというよりも、むしろ、喜んで引き受けるものになる。全体をつかさどり、高所から自己を評価し見守っていてくれる命令者からの、自己に与えられた尊い命令として、しばしば、ありがたくいただくものになる。崇高な任にふさわしい者として選びだされているのである。帰属する全体から重要な個と位置づけられ、大きな期待がよせられているのである。自分の能力一杯の仕事としては、困難のともなう苦しいものになることが予想されるが、それもやりがいとして、勇んでひきうけることになる。

喜んで自己犠牲を受け入れる使命、これは、ボランティアの場合も同じことであろう。他者のために無報酬で献身しようというボランティアは、端的に愛他の自己犠牲精神からなりたっている。ボランティアという英語には、志願兵という意味もある。祖国防衛のボランティアは、それを使命ともすることであろう。ただ、どこまでも自発性を尊ぶボランティアと違って、使命では、所属の全体とかその支配者から命令されているという意識がどこかにある。

５．命令するものへの一体化

世界よりも重い自分のいのちすらも、ばあいによっては捨てようということが使命感をもつもののもとにはある。使命を命じる全体なり存在は、自分自身よりも、一層大切なものになっているのであろう。共同体などの自己の属する全体が、守り発展させるに十分あたいすると思っているから、かれは、自己をそのための捨て石にできるのである。自己の生を犠牲にしてまでつくすに値するものであるかどうかは、ほかから見ると問題だったとしても、当人の価値判断におい

ては、いのちがけで守るべき至高の価値があると信じきっているのであり、その命令にも全幅の信をおいているのである。また、使命をあたえた方も、その担い手にふさわしいと選びあげているのであるから、これを大いに信頼しているのであって、相互のあいだにはつよい信頼関係が成立している。

使命では、忠実さも目立つ。根本的に受動的であって、自分のあり方を自分で決定するのではなく、端的には、使命をあたえる命令者にゆだね、あくまでも従順な使いとして使命をもつ。命令者の意のとおりに、しかもその意をくみとって主体的に動こうというのであり、有能な「忠犬」に徹するものだといえよう。

使命感をもつ者は、使命を与える存在なり全体への強い帰属意識、深い一体感情をもっている。全体の悲しみは、自己自身の悲しみである。全体は、大いなる自己そのものであり、小さなこの自己が、それのためにつくすことは、大いなる全体において自己自身が生きることにほかならない。ひとは、個としての自己を保存・維持することに懸命で、一面で利己的であるが、使命に関しては、これはあてはまらない。反対に自己を犠牲にしても全体を保存しようと献身的である。個が自己自身を全体の手段にしようと意志するのであり、ひとが、類的全体的存在であることを端的に示すことになる。しかも、使命においては、代償や報償は求めることがない。無私であり、献身的である。全体につくすことに生きがいを見い出しているのである。

ひとは、ここでは、本性的に社会的存在であることをしめす。自由は、ひとに固有の規定であり、かれは、他から自由に独立独歩であろうとするが、他面では、非自立的で、つよく社会・全体との結びつきをもとうとするのであって、ありやはちのように、全体のなかで束縛されて自分の生きがいを見い出していこうとする。使命は、全体と個（あるいはより下位の小集団）のきずなになり、ひとの社会性・非自立性を十分に満足させてくれる。それは、誰でもよいがというボランティアへの参加の比ではない。全体が、その個に使命を与えることで、個（あるいは小集団）は、自分が、たよりにされる、十分に存在理由をもったかけがえのない存在であることを確信できることになる。個は、その使命をはたし、これに尽力することで、その全体への結びつきを自らに強化しこれを確証していくことができる。使命に専心することは、これを求め命じた全体なり、至高の存在の意にしたがって、その意のなかに生きることになり、これに一体化し、そのなかにつつまれることになって、ひとは、深く安らぐことが可能となるのである。

６．自発性

使節、伝道者は、使命を受けたら、いよいよ異国へと旅立ち、一人立ちしなくてはならない。命を受けるということで根本的には受動的で依存的なのだが、いったん受けてからは、自立して自発的にこれを遂行していくのである。伝道＝使命は、孤独な異国において、自発的になされることにおいて、はじめて、真に伝道＝使命となる。

自分で能動的に自発的に執行していくのでなくては、使命は、発動せず、無と化してしまう。たんに与えられたのみの命令は、使命にはならない。やろうとの意欲のわかないもの、納得できないものは、これを「使い走り」などとして引きうけたとしても、「使命」としてはひきうけな

いであろう。その命令なり求めを、自分の能力の発揮の場所とし、情熱をかたむけていくにあたいするものとみなし、自主的、主体的に遂行していこうということがなくてはならない。使命の能動性・自発性は、その被授与の所与性・受動性と対等の重みをもった不可欠の契機だというべきであろう。

なかには、まったく自発的で、命令等の授与のないように見える使命もある。道徳的な当為は、ふつう自己が自己に命令する形になるが、使命にも、こういう形のものがある。「ひとの務めは、本来こうあるべきだ」というような形で、理想を自己自身で自覚して、これを自らに命令することで成立する使命がある。これを、Bestimmung（使命＝規定＝本性）の使命というとしたら、これは、そとの存在から命令されたり期待されたりすることで成立する使命（これを Beruf の使命といっておこう）とは区別されるべきかもしれない。Beruf の使命は、根本的に、まずは他から発せられてという受動性・被授与の所与性がなくてはならない。しかし、Bestimmung の使命では、そういうものがなく、命令するのは、自分自身である。自己立法的になっているのであり、さしあたり、他からという所与性は、ここには存在していないように見える。

もっとも、自己立法的に、あるべき務めを自覚するだけのところには、自らへの義務感あたりはあっても、「使命感」は生じてこないようにも思われる。一つの理想を達成しなくてはと心にちかうとき、同時にそこで使命感をもつことが可能になるためには、やはり、これを求め命じる声がどこかから聞こえてきて、授与・受動を感じとることがなくてはならないのではないか。自分の属する民族的な精神とか、一体感をもった全体が想定されて、これから命令されたり期待されているといった、受動・授与の意識をもつ必要があるのではないか。とすれば、Bestimmung の使命にも、Beruf の使命と同様に授与の受動性の契機が見いだされるといわなくてはならないであ ろう。

なお、自発性というと、自由意志(voluntas)に基づくものとしてのボランティアも、その根本規定に自発性をもつ。しかし、その自発性のあり方は、ここ使命においていわれるものとは相当に異なる。ボランティアでの自発性は、なんといっても、その仕事を引き受けるかどうかの選択の自由が中心規定となる。強制されるのではなく、自らの意志で選択するものだという自由・自発性である。その仕事はただ働きなのであり、強制されるものではなく、余裕がなくなったら自由にやめられる任意的なものであった。だが、使命の場合はそうはいかない。しばしば、引き受けることについては、強制的なものになる。報酬がでておれば、当然そうだし、自分が引き受けなければ重大な結果になるというような大切な仕事であれば、ボランティアのように、すきなようにとはいかない。そとから命令のある Beruf の使命では、当然それが強い。自らが自らに命じる Bestimmung の使命は、それよりは自由だろうが、それでも、自己の存在の証しとなる尊い務めとしてその社会のなかでの責務を自覚するのが通常で、全力をもってこれにかけ、自身の命を燃やしていくべきものとして、これを引き受けることについては強制の度合いが強いものとなる。

使命の自発性は、ボランティア的な、引き受けるかどうかの随意性・自由にあるのではなく、その任務を遂行していく場面での、その実行の自主的主体的な姿勢にある。ひとにいわれないで

も、どんどん仕事を自主的にしていくという自発性である。自らに発する創意工夫をもって能動的に取り組んでいく、任務遂行への主体的な姿勢である。使節・伝道者としてひとりになって、自らが独自に一生懸命になってその任務に取り組んでいくという意欲の自発性である。この自発性は、ボランティアにもなくはない。しかし、ボランティアは、余暇の余裕にやるもので、また誰でもができるような手助けが一般的であって、これに命をかけるようなものではないから、使命に比べると、そういう、自己をきびしく駆り立てていく実行意志の自発性は、弱いものにならざるをえないであろう。

７．分限の自覚

使命は、自発的な働きにおいてなりたつが、それは、分限をわきまえてのものである。全体のなかの一つの務め・役割であり、一つの歯車であることを自覚している。しかも、その限定された務めとしての使命は、自己の能力のもてる限界になることが多い。Bestimmung(規定＝使命)を、ヘーゲルは、限定的な「一定 bestimmt」の存在「定有」の領域に位置づけ（註 9)、固有の「限界」をもって存立しているものとみた（註 10)。使命では、自己の能力にふさわしい特定の務めをになうのである。使命を感じるものは、そういう一定の、限界づけられたおのれの分限を自覚し、これに挑戦し、精一杯をつくそうと自発的につとめるものであろう。

使命においては、自己の固有性への目覚めがある。全体等に自己をつくして、これに一体化しているのだが、他方では、自己自身がなにものであるのかということを自覚していく面をもつ。使命が与えられるのは、その個の能力が評価されてその集団のうちで選ばれているのであろうから、そのことで、当人はその固有の能力にめざめることになる。しかも、自らのぎりぎりまでが試されるような高い課題に向かうのであれば、その限界の自覚も必要で、自分にできることとできないことの両方を示すおのれの「分限」に目覚めることになろう。

使命は、全体の部分・手段だが、疎外されているのではない。使命のもとでは、全体はその個人のそとにあって、ふつうには考慮外にとどまり、その点では、使命を担う個人は、部分人間になっているともいえる。しかし、能力をおさえつけられ、これを剥奪されての部分化とは逆であり、自己の持ち分がそこに生かされて、生き生きとし、生きがいを感じているのである。その限りにおいては、全体から疎外されたり、自己を喪失しているものではなかろう。

使命は、全体の部分を担うものとしては、「分業」になる。分業は、マルクス（『ドイチェ・イデオロギー』『経済学・哲学草稿』）などからは、部分人間をつくるものとみなされて、そういう「一面的な使命 Beruf」の否定、「分業によってこれまで実践的につく られた使命 Beruf の否定」（註 11）がいわれ、その反対が、つまり、朝は大工仕事をし、昼からは釣りをしてというような、「分業を廃棄する」（註 12）ことで可能になる「全体的個人 totale Individuen」（註 13）「全体的人間 totaler Mensch」(註 14)の理想が対置された。たしかに、近代資本制下の分業は、全体から疎外された部分人間をつくった。ルターが世俗の職業を神からの「使命」としたのは、聖職者のみが神の思し召しにかなった特別のものではなく、世俗の職業もおなじく尊いとみなし

た点において意義深いものがあったのだろう。しかし、その誇らしいBeruf（使命＝職業）の名のもとにすすんでいったものは、極端な分業化であり、部分人間化、人間の自己喪失化であったといってよい。そういう分業は、たしかに否定されるべきものであろう。

だが、ひとには、各人各様の能力が、得手不得手があり、そのひとの人生は、そのすぐれている一定の能力を生かすことにおいて開花するものであろう。ひとが全面的に発達することは、そのもてる能力の多様な可能性の開発として、また、各人が、その社会の主人公として、あらゆる方面のことがらに有効に関与できるために大切なことであろう。しかし、基礎的な全体的能力の開発とともに各人の個性もおのずからはっきりしてくるのであって、そのなかでとくにすぐれている点を一層のばし、その個性的な働きにおいて、全体のなかで固有の存在意義を見いだして社会的に貢献していけるなら、それは、本望ということになるのではないか。使命では、そういう分限の自覚をもって、全体のなかで、部分に徹して自己を生かしていくのである。

８．できる（Koennen）という自信

使命は、「できる」ものに与えられる。かれは、全体の立場から見て、その能力において適任だとみなされ、選ばれ指名されているのである。使命感をいだくものは、使命への自信をもっているのがふつうであろう。「この崇高な使命は、自分にふさわしいもので、これへの代替者はいない」と使命へと情熱をかたむけていく。これは、選良意識として、周囲が惰眠をむさぼり享楽にふけっていても、これにそまることなく、使命に邁進していく、誇らしい心がまえとなる。noblesse oblige(高貴なものの義務)の気概である。しかし、ときにはこれは、マイナスに作用し、「できない」ものたちの常識的なこえを聞こうとしない独善独断におちいることもある。

能力をもつ、使命をになうべき者は、また、その務めが真に重大だと分かる数少ない存在なのでもある。新しくはじめていくボランティアでも、そういうことはしばしばあるが、その境遇、立場、能力からいって、その使命は、かれにしか分からないことであったり、かれ以外には、その期待や要望の声なき声を聞きとり、理解することができないこともある。これを引き受けないとしたら、その重要な務めは、担い手のいないままに、重大な結果をもたらすことになる。能力があり自覚があるからこそ、自己自身をそれにささげざるをえない、ということになるわけである。

与えられた命令が高すぎても低すぎても、ひとは、これを使命とは受け取らない。ひとを小馬鹿にしたような低い、こどもの使いのようなものを使命としないことはいうまでもない。「できる」といっても、だれにでも「できる」ものは、使命とはならない。当人ぐらいにしかできないような高い、いわばぎりぎりの「できる」ものが、使命にはいちばん適している。そのひとの能力を十分生かすものが使命となる。しかし、あまりに高すぎるものも、それは自分には分不相応で、分限を越えていて、使命としてはふさわしくないと受け取ることがありそうである。ほかにあきらかに能力の高いものがいるとしたら、その人にくらべると自分は「できない」ものになり、自分にはふさわしくないものとなろう。ただし、そこでは自分が一番その点での能力があり、被害が最小で済むのだとしたら、客観的には無理なことで「できない」だろうと分かっていても、

ましな結果と少ない被害を考えて、これをひきうけ使命とすることであろう。

ひとは、その能力があっても、ひとりのままでは十分にはこれを発揮せず、そとから刺激されて、その芽をのばしていくようなところがある。認められれば、その能力は、一層その存在を誇示しようと張りきる。使命は、当人を選ばれた存在であるといい、その能力をかっているのであり、ましてや、全体の命運のかかる危機的な課題があたえられたりすると、不可能なことも可能にするぐらいに、かれを発奮させずにはおかない。使命を与えられて、「できる」能力があると選ばれたものは、その能力を、さらに高めて「一層できる」ものへと自身を高めていくし、さらには、「できない」だろうといわれていたものも、使命のつよい命令・期待のもとでは奇蹟をおこし、「できる」ものとなっていくことすらある。

９．はたすべき(Sollen)義務・責務

使命では、高い課題が与えられることが多く、強い意志を必要とする。課題へと自己を強制して、使命は、当為的な務めになる。それは、はたされるべき重要な課題・務めである。当人にとってそれは生きがいで目的となるものであるが、あそびではない。真剣さの求められる崇高な務めであって、ときには、自身を厳しく強制して、その実行につとめなくてはならないこととなる。

花屋さんを自らの使命とし生きがいとするものは、こういう強制的な当為は持っていないのではないかといわれるかもしれない。ふつうの状態ではそうであろう。こういうものに限らず、使命は、いつも意識されているわけではない。使命にかかわって決断等をなすべき事態が生じたときに、使命を意識し、それにそった決断なり行為をなすものになるのである。花屋さんも、なにかの困難に出会い、商売としては店じまいした方がいいような状態におちいったとき、それまでは心の底にひかえたままであった「使命感」をあらためて浮上させて、困難にたちむかっていくのである。

利己的な自己の部分は、ばあいによると使命をいやがることであろうが、使命をひきうける全体的理性的な自己がこれを強制して、だまらせ、ひっぱっていく。あるいは、使命を忘れがちの日常のなかで、ふとこれを意識するとき、怠惰をむちうち自己強制していく。使命をはたすことは、そう簡単ではない。ときには躊躇することにもなる。これをふりきりはげまして、「できる koennen」のであれば、当然これを「なすべし sollen」と、自らの当為(Sollen)を自覚することになる。

使命は、自己強制的で義務的な側面を有する。ただし、使命の義務は、すこし特殊なところがある。義務は、低く基礎的なもののばあい、だれでもできることなので、それをしないこと、それへの違反は、許されず、厳格にこれを守ることが求められる。だが、ふつうのひとにはなかなか実行できるようなものではない高い義務は、「できない」でもともとであれば、これに違反しても大目に見られる。ところが、使命の義務のばあい、ふつうのひとには出来ないもので、それは、高い義務になるのだが、低い義務と同じく、「しないことは許されない」厳格なものになる。使命は、崇高な義務であるけれども、当人には、能力があって「できる」ことであるから、

やって当り前の面があることと、その分担部分は、重要な任務であるから、これを欠いたばあい、重大な影響がでてしまうわけで、その点からも、しなくても許されるものとはなりにくいのであろう。

さらに、一般的な義務とちがって、使命では「いやいやながら」ということも、少ないか、存在しない。誇り・やりがいが大きいので、エゴは、しぶしぶというところがあっても、その自尊心をくすぐられることもあって、簡単に押さえられ、その不快感は、使命の遂行の喜びのまえに影をうしなう。ときに、怠惰な日常生活のなかでは、つい使命も忘れがちになり、とどこおりがちとなるが、それでも、「使命」を思い出したときには、いやいやながらということはなく、これに勇気をふるい起こし発奮するものであろう。

使命には、責務がともなう。「しないことはゆるされない」と義務づけられているのであれば、それをしなかったばあいは、責任が問われることになる。「しないことがゆるされない」とは、「しなかった」ときには、別の方法において「する」ことが強制されるということである。つまり、つぐないが必要で、再度実行するか、それが不可能なら、これにみあう補償をおこない、きびしい非難・罰を受け入れ、責めを負うことを覚悟しなくてはならない。

１０．自己実現

使命には、重い責任を感じなくてはならないとしても、それは、かならずしも重苦しい圧迫となるものではないし、使命を感じるそのときには、これ自体から逃げだしたいと思うことは、あまりないのではないか。責任をもたねばならないということは、使命では、責任をもたせてもらえ、重責を担えるのだという誇りともなり、自己の存在の尊さの自覚となるのでもある。

使命の遂行のうちには、誇りがあり、喜びがある。ひとは、みんなからその存在を認められることを求めている。社会的存在としてその存在に固有の意義が見いだされることを望んでいる。使命は、それを与える。しかも、尊い任務のひいでた遂行者という誇らしい意義を与えるのである。厳粛な任務として、使命には、忍耐・精進・克己が求められるが、使命感をもつものは、これを苦とすることが少ない。その努力は、しがいのある苦労である。やりがいがあり、生きがいがそこに満たされているのであれば、喜びはその材料に欠くことがない。

使命には、ひとは、情熱をそそぐ。情熱は、悪いこと（少なくとも当人がそう思っていること）にはそそがれない。情熱は、感情的ささえをもった、強い意志の働きであり、ことをなしとげる力は大きい。使命では、それがこれを担うもののうちに発動しているのであり、さらに、そとからは、崇高な命令・高い評価・大きな期待が引き立て、押し立ててくれるのであって、まさに鬼に金棒である。

ヘーゲルは、その使命（＝規定）論において、使命の「充実 Erfuellung」をいう（註 15)。使命をになう者は、その目的にむけて立ち上がり、諸種の妨害をはねのけながらこれを貫徹し、これを達成（erfuellen）していく。その一歩一歩 において、使命は「充実」されていく。主観的には、使命には、充実感をもつ。情熱をかたむけ、命すらをすててよいところが見つかったのである。自己の最大限をつくして、生きがいに満たされているのである。使命において、全体のな

かで求められているすぐれた自己の能力の発揮、その固有性の発揮がなり、自己がそこに実現されることになる。自分がなにものであるのかという自己のアイデンティティーを使命は確かなものにしてくれる。

この点で、ヘーゲルが使命＝規定を「即自有 Ansichsein」としていることに注目してよいであろう。ヘーゲルは、an sich（自己に即して） と an ihm（自己のもとに）を区別し（註 16)、後者は、自分のもとにあって、所有している(haben)もの、したがって手離すこともできるようなものとの意味でつかい、前者は、自己に即しているものとして、自己そのものをなす(sein)ものととらえる。使命は、an sich なもの、自己の存在そのもの、 自己の本性そのものだというわけである。使命は、神等から与えられ命じられたものであろうけれども、それは、これを自らの生きがいとし、これに生きることにおいてそのひと自身をあらわすものになる。使命は、即自有として自己そのものをつくっていくのである。

１１．「全体的個人」の使命

使命は、ひとに生きがいを感じさせることができる。新興宗教に生きる者が、まるでひとが違ったようになって使命感に生き生きとしているのを見ることがある。しかし、ときに、その行動は反社会的なものとなる。使命には危険な側面もありそうである。使命において、ひとは一途になり、みごとな成果をあげることができるが、それの前提となる出発点の使命の命令そのものへの批判的な眼はないのが普通である。それが、ときに使命にそそぐ情熱をだいなしにしてしまうのである。

使命をいだくものは、それを命じる存在に一体化しているので、かりに、犯罪的行為を命じられたとしても、それが世間的には悪とわかっていても、命令者の大目的のやむをえない必要悪的な一手段として納得して、これを受け入れることになりやすい。使命感は、ここでは、悪のために尽力するという、おぞましいものになっていく。だが、使命という活動形式そのものが悪いのではないであろう（勇気や節制の徳と同様、その実行者しだいで、悪のもとでは悪に奉仕することになる)。使命は、創造性や社会性といったひとの本性を満たす活動の一つの形態であり、それを見い出し、それをあたえていくことは大切なことであろう。使命は、持つなといっても、積極的に生きようとするものは、おそらくどこかにこれを見い出すことであろう。世のリーダーたちは、自身とその組織を成員の信頼に足るものにしながら、各員の能力を見定めて、これを生かし、適切な使命を与えていくことが必要なのである。

しかし、使命自体、悪につけこまれる弱い面をもっており、悪にのらない手立てをもつことも必要なように思われる。使命が悪の先兵になるのは、うけいれた命令そのものの善悪を判断しないことに大きな原因がある。とすれば、これをさけ、命令そのものを批判的に見られるようにすることが重要なわけで、それには、何といっても自分自身を命令者と対等の立場におくことであろう。カント（『道徳形而上学原論』）は、理想とする「目的の国」では、その成員は、同時にその「元首 Oberhaupt」になっていなくてはならないといった(註 17)。各人が同時に立法者となって自己立法し、自分が自分に命令するものになる必要があるのだと。「元首になれ！」とは、

使命でいえば、自分で自分に命じる形の(Bestimmung の)使命にせよ、ということである。そういう元首になるためには、自己がしっかりと自立していかなくてはならない。自分の行動を自分だけではなかなか決められず、まわりをうかがい、できれば誰かに決めてもらおうというような依存的態度に終始するわれわれには、これは、そう簡単なことではなさそうである。

同じようなことだが、マルクスの描いた、部分人間ではなく「全体的人間」(註 18)「全体的個人」(註 19) になれという主張にも傾聴すべきものがありそうである。使命は特定の課題の分担にとどまり、そこにのみ焦点をあわせがちである。そのすぐれた能力が生かされているということの反面には、ほかのこととか全体については、まったくお留守になっているということがあり、これが全体をにぎる命令者に、ときに悪用されるのである。全体への視座をもち、他のことがらへの多様な視座を同時にもっている全体的人間になるなら、そういう悪用にも自身において歯止めがかけられようというものである。

カント的な「元首」なり、マルクス的な「全体的人間」になって、命令の正当性を判断し、これを自身の使命としてからも、問題がでてきたばあいには、それからの撤退も決断できるような、そういう姿勢があれば (やさしいものではなかろうけれども)、使命は、悪用から身をまもることができるのではなかろうか。

註

1)Max Weber; Gesammelte Aufsaetze zur Religionssoziologie. Bd.1. S.46f.
2)vgl.Weber; ibid. S.66
3)Fichtes Werke. hrsg.von I.H.Fichte.Bd.1. S.210
4)G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Baenden. Suhrkamp Verlag. Bd.5. S.132
5)Immanuel Kants Werke. hrsg.von E.Cassirer. Bd.4. S.329
6)Kant; ibid. Bd.8. S.219
7)Kant; ibid. Bd.8. S.219
8)Hegel; ibid. Bd.5. S.136f.
9)Hegel; ibid. Bd.5. S.117
10)vgl.Hegel; ibid. Bd.5. S.136f.
11)Marx Engels Werke. Dietz Verlag. Bd.3. S.273
12)Marx; ibid. Bd.3. S.74
13)Marx: ibid. Bd.3. S.68
14)Marx; ibid. Bd.40. S.539
15)Hegel; ibid. Bd.5. S.132f.
16)Hegel; ibid. Bd.5. S.132.
17)Kant; ibid. Bd.4. S.292
18)Marx; ibid. Bd.40. S.539
19)Marx: ibid. Bd.3. S.68

平成８年　６月　　『倫理学研究』（広島大学倫理学研究会）第９号 1~20 頁